

イラク

—錯綜する政治・軍事対立と描き得ぬ未来—

山尾 大

「モスル解放作戦に参加するのは正規軍と治安機関に限定されるべきだ。人民動員隊が正規軍の指揮下に入れば、話は別だ」（二〇一六年九月二十七日『ハヤート』）。

これは、「イスラーム国」（IS）の最大の支配地モスルの奪回作戦開始（一〇月一七日）に先立って、大きな大衆動員力を誇るサドル派の指導者ムクタダー・サドルが述べた言葉である。この発言は、イラク人のみならず、イラク専門家をも驚愕させるものだった。というのも、これはシリア派民兵のアンブレラ組織である人民動員隊がモスル解放作戦に参加することに、同じシリア派のサドルが批判的であることを意味したからだ。

同時にこれは、現在のイラク政治がこれまでになく分断された状況にあることを端的に物語っている。

る。本稿では、この発言を手掛かりに、複雑に絡まったイラク政治の糸を解きほぐしてみたい。

●シリア派の利害か、ナシヨナルな紐帯か

そもそも、サドルが冒頭の発言をしたのはなぜなのか。それはおそらく、サドルがスンナ派の批判に配慮したからだ。かねてからスンナ派は、人民動員隊を「イランの支援を受けたシリア派民兵の寄合にすぎず、イラク人全体を代表していない」と批判していたからだ。では、なぜ人民動員隊はこのような批判を受けるのだろうか。

それにはもちろん理由があった。そもそも、人民動員隊は、シリア派の被害を叫ぶISからシリア派コミュニティを守るために、シリア派宗教界の呼びかけに応じて結成された。もともと別々であった

民兵組織が再動員され、それが緩やかに統合されたアンブレラ組織であるから、当然指揮系統も統一されていない。だが、この人民動員隊は、自国の巡礼者のためにシリア派聖地を保護したいイランの革命防衛隊からの大規模な支援を受けて強力になり、イラク正規軍を凌駕するようになった。その結果、IS掃討作戦は人民動員隊が主導し始めた。テイクリート、キルクーク、デイヤラーなどの解放には全て、人民動員隊が重大で決定的な役割を果たした。

だが、人民動員隊は、ISの支配に協力したとして、解放区でスンナ派住民に報復を始めた。当然、IS支配に協力せざるを得なかった住民はいただろう。だが、多くはISの被害者であり、報復活動は大きな反発を惹起した。これはスンナ派とシリア派の対立に発展

した。人民動員隊がイランの支援を受けていたことで、この宗派対立が加速した。人民動員隊はイランの支援を受けたシリア派民兵で、イラク人全体を代表していない、というわけだ。モスル解放作戦への人民動員隊の参加が拒否されたのはこれが原因であった。

それは違う、と人民動員隊の司令官たちは言い続けてきた。人民動員隊にはスンナ派やキリスト教徒も多数含まれているため、全イラクを代表しているのだと。

こうした対立軸のなかでサドル派が提示したのが、シリア派民兵は解放作戦の前面に出ない、という代替案であった。もとより、ナシヨナリズムを重視するサドル派の姿勢は、戦後一貫していた。反米闘争でスンナ派と連携したのもサドル派であり、ISとの戦いでは当初より民兵の党旗を下ろすように呼びかけていた。冒頭の発言は、この政策の延長上にあったのかもしれない。

サドル派のこうした姿勢は、人民動員隊の他の司令官との対立を惹起してきた。ハーディー・アミリー（バドル軍団司令官）やアブー・マフディー・ムハンデイスら人民動員隊の事実上の司令官は、

旧体制下で長らくイランに亡命し、イラン・イラク戦争ではイランの革命防衛隊側に立って戦ってきた百戦錬磨の強面である。彼らは、イランを後ろ盾に自らの影響力や利権を拡大することを目指し、反対にサドル派は、ナシヨナリズムを貫徹することで大衆動員力を拡大することに躍起になっている。

● 本当の対決はモスル解放作戦後だ

ところで、人民動員隊に批判的なスンナ派は一致団結しているのか。残念ながら、答えは否だ。

モスル解放作戦に従事しているのは、イラク軍特殊部隊を筆頭に、正規軍約三万に加え、クルド軍のペシュメルガ約一万、現地の部族軍約一万、そして人民動員隊である。そのなかで、自他ともにスンナ派勢力を主張するのが部族軍である。その中心にいるのは、モスル陥落後に解任されたヌジャイフイー元知事率いる「部族動員隊」だ。元知事は越境したトルコ軍戦車部隊を後ろ盾に、ニーナワー県の支配を取り戻し、モスルを中心とするスンナ派地域政府を建設することを目指している。それに加え、ISによるモスル陥落に手を

貸した旧国軍将校の勢力も、IS後のモスルで復権を目指して暗躍している。

その一方で、ヌジャイフイー元知事がスンナ派地域の主導権を掌握することに批判的な他地域の部族勢力もいる。さらに、同じスンナ派でも、ディヤラー州出身のジュブリー州会議長などは、スンナ派地域政府形成そのものに反対しており、スンナ派としてのまともなものは皆無に等しい。

事情はクルドもほとんど同じだ。クルド勢力は、モスル市東方に広がる肥沃なニーナワー平野をクルディスタン地域政府（KRG）に併合することを目指して戦っている。実行使で支配の既成事実を積み上げ、事実上の国家となったKRGを拡大しようというわけだ。とはいえ、クルド人も一枚岩ではない。KRGで権威主義的な支配を続けるパールザーニー大統領への批判は大きく、反対勢力との分裂や対立が激化している。

スンナ派地域政府の形成を目論むスンナ派と、それに反対するスンナ派。ニーナワー平野へと支配地拡大を目指すクルド人と、その指導者の強権化に反対するクルド人。そして、イランからの潤沢な

支援を背景に自らの権限強化を目指すシーア派勢力と、それに対抗してナシヨナルな規範をかかげるシーア派勢力。

いずれも、ISからモスルを解放するために戦っているようにみえて、実際はその後の利権争いをしているのである。

● 描き得ぬ未来

悲しいことに、分断が進んだイラク政治の着地点はみえない。対立軸は枚挙に暇がない。ISの台頭以降、シーア派とスンナ派の宗派対立も促進されるようになった。政治利権をめぐる競合や政敵の排除が目的であった対立が、いつしか宗派の違いをめぐるそれに変質したからだ。

さらに、IS掃討作戦の長期化でかさむ戦費が、おりからの油価下落と重なって財政を圧迫し、行政サービスの低下が人々の不満を醸成した。そのなかで、政治エリートの大規模な汚職が発覚し、人々の怒りは沸点に達した。機能しない民主主義と良くならない政治に、人々は失望感を募らせていったのである。

こうして既存の政治エリートや社会的エスタブリッシュメントと

市井の人々の乖離が広がった。政府が改革を叫んでも、政治不信はますます強まり、エリートと大衆の溝は深まるばかりだ。そのなかでサドル派は大衆を代表していると主張し続けている。他方、上述のように政治エリートの分裂はかつてないほど深刻だ。

問題は、こうした複数の対立がソフトランディングしそうでないという点だ。モスルが軍事的に解放されたとしても、その後どうなるのかよく分からない。少なくとも、しばしば指摘されるように、北東部はクルド人、中西部はスンナ派、そして中南部はシーア派というような三分割に落ち着くことはないだろう。割れるのであれば、より細くなるだろう。

政治エリートが自らの利権の拡大に邁進するあまり分裂を繰り返す、それに愛想を尽かす市井の人々。ISの拡大が露呈させたのは、極限まで分断されたイラクの現状だ。こうしてあまりに複雑化した対立構造は、近未来予測図すら、描くことを困難にしている。

（やまお だい／九州大学比較社会文化研究院准教授）